

I 「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》としての実践」

個から小集団へ、小集団から再び個へという探究活動を通して個の学びを高めていく

ー仲間との鑑賞活動から、自分の中に新しい価値を見出す(第2学年)ー



鑑賞活動において、子どもたちの見方を「広げる」「深める」ためにはどのような展開が考えられるだろうか。これまで、「作品から物語を想像する」「五感を使って味わう」「作品と同じポーズをとってみる」など、いくつかの方法を試みてきた。仲間とともに、感じたことを語り合いながら、新たな見方を発見していくこともその一つである。

本題材では、何度も手に取りじっくり見ることのできるカードを用いて互いの感じ方を共有する場から見方を「広げ」小作品を制作することから、理解を「深める」活動を実践した。

1 学びの構想

子どもたちの鑑賞活動を広げ、深める

子どもたちは、入学時から継続しているお勧め作品スピーチという鑑賞活動や書体から受ける印象を班で話し合う活動から、仲間の見方は様々であること、仲間の意見は自分の作品作りにも大きく影響するという事に気づいた。本題材では、アートカードを見比べながら作品の魅力を見つけ出す。子どもたちは、毎時間のお勧め作品スピーチで五感を使って作品を鑑賞する、ということが続けてきている。今度はいくつかの作品を比較してみるという見方を獲得させたい。

さらに今回は、鑑賞と作品制作を連続させることで、子どもたちの鑑賞活動が深まることを期待した。日本美術の特徴を取り入れた作品作りから、鑑賞活動からは気づかなかった新たな魅力に気づくことを期待する。ジャポニスムから始まり、さまざまな時代の日本美術作品を鑑賞作品として取り上げながら、現代まで日本人が大切にしている美意識について考えさせたい。

3年間の学びのつながりを意識する

本校美術科では、作品に親しむことを大切に、鑑賞からわきあがった思いに間違いはないということ強調してこれまで学びを進めてきた。今回も鑑賞の仕方を広げていくこととともに、鑑賞作品もさまざまなものを取り上げていきたいと考えている。本題材は、日本と諸外国との文化交流ということと、自国の文化に興味関心をもつことをねらいとして設定した。今後は、現代美術といわれる作品や、パブ

リックアートにも題材を広げていきたい。そのためにじっくりと時間をとって作品の魅力について考える活動としたい。

2 学びのストーリー

(1) 「タンギー爺さんの肖像」の鑑賞から、日本と西洋の文化の交流について理解しよう (第1時)

有名な画家の作品をじっくり鑑賞するために画像をスクリーンに映すことから授業を開始した。

教師：ゴッホの「タンギー爺さんの肖像」という作品です。描かれているものや、作品を見て疑問に思ったことなどをワークシートにメモしていこう。ところで今回は、班で一人美術史家役の人を立てて、その人に、みんなの疑問に答えてもらいたいと思う。美術史家役の人は、別室に集まってどのように答えようか作戦を練ることにしよう。



描かれているものを見つける

子どもたちは、スクリーンに映った画像と、班に2枚ずつ配布したコピー資料とを交互に見ながら、作品に描かれているものを見つけていった。画像を見ながら自然と子どもたちの口からつぶやきが漏れる。

生徒：たくさん浮世絵みたいなのが後ろにある。
 生徒：このじいさん、ぼーっとしてる。
 生徒：目の焦点が合っていないようにも見える。
 生徒：後ろの絵って日本の風景ばかり。

拓斗は、1年生の時から鑑賞活動に苦手意識を持っておらず、班の仲間と互いにいろいろなことをつぶやき合っている。ワークシートへの記載はあまりないが、班員全員が遠慮なく気づいたことを言い合っていて楽しそうである。

隣の班の敦は、拓斗とは対照的に、仲間の会話に耳を傾けているようではあるが、積極的に会話に加わりようとはしていない。敦は、これまでも積極的に発言することはないが、作品制作や鑑賞活動それぞれにおいて自分の中で表現を工夫しようとする姿が見られた。二人のワークシートの記入内容は次のようであった。

- ・背景が日本の浮世絵・桜、富士山、朝顔、雪国の風景が描かれている。麦わら帽子→セーターを着ている!?→何の季節?目が青いからロシア人? (拓斗)
- ・日本のものが後ろに描かれている(冬の絵、桜、人、朝顔) 爺さんはゆったりしている。穏やかな顔。座って正面を向いている肖像。活発そう。日本を旅していそう。背景が明るいけれど服は暗い。仕事は? (敦)

今回班の中に一人、美術史家役を設定した。仲間に質問することで質問しやすくなり、また美術史家役の子どもにとっては、質問に答えるためにじっくりと作品と向き合うのではないかと考えたからである。

班内で、作品鑑賞を進めるのと並行して、各班の美術史家役が準備室に集まり、予想される質問とその答え方を出し合った。

教師：どんな質問が出てきそう?
 生徒：なんで日本の浮世絵みたいなものが描かれているのか。
 教師：そしたら、なんて答える?
 生徒：ゴッホが日本が好きだったから
 生徒：タンギー爺さんが、日本好きだった
 教師：他には、ない? わかった。では、みんなは自分がかこうだと思う方で答えればいいよ。他にはどんな質問が出ると思う?
 生徒：なぜ、家の中でぼうしをかぶっているのかとか
 教師：なるほど、そうだね。どう思う?
 生徒：うーん……。今、仕事から帰ってきたところだから。
 生徒：見せたくないものを隠すため。髪が薄いとか……。

美術史家役の子どもたちは、自分なりの考えを固めて、それぞれの班に戻って、仲間からの質問に答える。どのような質疑応答がなされたのかを、ワークシートに記入することと、美術史家役の答えに納得がいかなかった場合は、自分の考えも記入しておくことを指示した。

拓斗と敦のそれぞれの班での質疑応答は次のとおりである。拓斗も敦も質問者の一人であった。

<拓斗の班>

Q：タンギー爺さんと背景の組み合わせはなぜ?なぜ日本?
 A：タンギー爺さんが日本のことが好きか、ゴッホが好きかどうか
 Q：なぜ麦わら帽子なのに分厚い服を着ているの?
 A：みせたくないものを隠すため おしゃれ?
 Q：タンギーさんはどこの人?
 A：ヨーロッパ人 鼻が高い 肌が白い

<敦の班>

Q：いつ描かれた?
 A：昼 なぜなら昼は仕事をしている
 Q：なぜバックが日本?
 A：描かれたところは、オランダ。日本とオランダは関係があり、ゴッホは日本のものに影響を受けて。
 Q：帽子をなぜかぶっている?
 A：仕事をしていてそのままを絵にしたかったから (農業していた)



美術史家役に質問する

Q：タンギーさんはいくつ?
 A：60歳くらい
 Q：この人は今なにをしているの?
 A：無心

必ず全員が一つは質問することという条件で質疑応答を開始したが、美術史家役の答えに対して、さらに質問がなされている様子が見られたり、改めて作品の一部分を5人で見つめ直している班もあって、美術史家役を設定したことで鑑賞活動が活発になったと感じた。

班での鑑賞活動の後に、教師から当時の日本と西

洋の事情について説明した。19世紀末それまで鎖国政策を取っていた日本がロンドンやパリで開かれた万国博覧会に自国の美術品を出品すると、それらはジャポニズムとして流行し、ゴッホをはじめとして当時の西洋人をとりこにしたのである。

なぜ、当時の西洋でジャポニズムが流行したのだろうか。子どもたちは、当時の西洋人が感じた日本美術の魅力についていくつかの予想を立てた。

- ・とってもシンプルだから。
- ・景色や人物など、あるものをしっかり描くから。
- ・西洋より鮮やか
- ・日本の着物や顔など西洋人には感じられない想像しない部分だった。
- ・新しい表現を見て斬新だった。
- ・静かな感じ。
- ・派手じゃない

など、子どもたちは日本美術の魅力を自分自身の言葉で表現していた。

拓斗は、「金・白・黒・暗い色・余白」、敦は「質素な感じ。わびさび」と書いていた。

(2) アートカードから、日本美術の魅力を探ろう (第2～4時)

各自がアートカードと向き合う

自分たちが、予想する魅力が合っているかどうかアートカードを用いて検証してみよう」と提案した。

子どもたちが予想した魅力は、カテゴリー分けすると、現在の3分の1程度にまとめられてしまいそうではあったが、用いられている言葉の表現が豊かであったため、あえてそのまますべて提示し、班で少しずつ分担して検証することとした。

西洋人は 日本美術の何を魅力的だと感じたのだろう :2B		
・ 珍しかった	・ 西洋の技術とは違う方法で描く	・ 余白
・ 外国にないような絵	・ 心が落ち着く	
・ 白と黒を使って、主人公を美しく表現できたから(黒白を使って鮮やかな色をさらに鮮やかに)	・ 他の色が目立つ	
・ 表情の違い(つり目とか)	・ 日本人の格好	
・ 派手ではないところ? 華やかさ(日本独特の)	・ 肌が白い	
・ 繊細さ	・ 激しい色使い	・ 豪華さ
・ 丁寧さ	・ はっきり描く	・ 色鮮やか
		・ 質素でわびさび
・ 大和絵みたいな雰囲気(西洋は本物に近い)		
・ 自分の国の文化が表れている	・ 中心のものをはっきり	
・ 平和なほのぼのとした雰囲気	・ 黒色で微妙な色の違いで表現	
・ あたりまえを極めるところ	・ 落ち着いた静かな感じ	
・ 飾らない美しさ	・ とてもシンプル	・ 素朴なデザイン
・ 金	・ 暗い色	・ 力強さ
		・ 個性的
・ あるものをしっかり描く	・ なめらかで柔らかく	

教師：各班がこの表にまとめられた項目の4つか5つずつを分担して、あっているかどうかアートカードを使って調べていこう。どのカードから、どのような魅力が確かめられたかわかるように、ワークシートにまとめよう。班で分担したもの以外に、自分が予想したものに

ついても、確かめてみよう。さらに、新しく発見した魅力があったら、それもメモしておこう。

拓斗の班が担当した項目は、「筆づかい」「丁寧さ」「はっきり描く」「色鮮やか」「質素でわびさび」の5つ。敦の班が検証したのは、「白と黒を使って、主人公を美しく表現できたから(黒白を使って鮮やかな色をさらに鮮やかに)」「他の色が目立つ」「表情の違い(つり目とか)」「日本人の格好」「華やかさ(日本独特の)」の5つである。

34枚のカードを机上にばらばらに広げたり、丁寧に一枚ずつ並べたりと、班によってさまざまな方法で、検証が始まった。拓斗の班では、机上にばらまかれたカードを各々が一枚ずつ手に取りながら、検証する魅力に当てはまるかどうかを考えているようであった。ときどき、「これ、何だと思う?」と描かれているものを、確かめ合う姿が見られた。

拓斗は、どの項目についても数枚ずつ根拠となるカードをあげていた。

<拓斗の記録内容(数字はカードの番号)>

「はっきり描く」6, 8, 24, D, 22

「質素でわびさび」F, 21, 3, 4, I, 12

「筆使い」C, 18, 17, 2, 19, 21, 3, 47, 26

共通しているところ・・・草木の筋の筆の濃さ・細さを利用

敦の班では、健が次々とカードを手に取り、「この顔変」「これって誰かに似てるよな」「これは、白と黒で描いてある」などと思いついたことをひたすらつぶやいていた。カードを独り占めすると言われていたりしながらも、未来や有芽たちと会話してカードを鑑賞している。その中で敦は、自分の近くにあるカードから1枚ずつ手に取り、じっくりと眺めながら、納得したことを書き留めているようである。

<敦の記録内容>

2・・・白黒

G・・・日本人の服装

21・・・赤の実の色が目立つ

I・・・日本独特の華やかさ

B・・・表情の違い

47・・・金色+地味な色⇒華やか+不思議な感じ

拓斗は、筆使いの特徴について、絵具の濃淡や、筆の太さについて言及し、敦は、新たな魅力として、華やかさの代表である金色と逆の色調の色とを併用して使うことで生じる印象について、「不思議な感じ」と表現していた。

班で、互いの結果を報告し合おう

各自が、カードと相対することで確かめたり発見したりした魅力を、班員に報告し合った。拓斗の班は、怜奈が進行役となり、話し合いを進めていった。

怜奈：どれが筆使いが感じられる作品だった？

大我：18, 21, 47, C。Cで言うと墨の濃さが変わっていて筆使いを感じる。ぼやぼやしている。

眞緒：23のこの人の頭の部分とか工夫してあるよ

怜奈：G, 10, 15, 36, F, とか。筆で書いているものは色の濃淡があるから。

詩織：DとかCとか31は、筆で描いているのにそうじゃないような感じがする。

拓斗：C, 18, 17, 2, 19, 21, 3, 47, 26。草や木があるんだけど。草は、初め筆を紙に押し付けると太くなるからそうやって描いて、後で、すうっとすると細くなって草とか松の葉を表現していると思う。19は、パツと見、何かわからんけど、海と空の境界線、海と土の境界線に迷っている感じ。雲が夕日にかかっている感じがする。

筆跡が感じられる作品を取り上げることから始まった話し合いは、詩織が怜奈の発言の中の「色の濃淡」という言葉に反応して、「筆で描いているのにそうじゃないような」作品の紹介につながり、さらに拓斗は二種類の特徴を紹介するに至った。しっかりと筆跡が残り、その極端な力の強弱が魅力である作品と、詩織が紹介したように筆跡があいまいでそれによって、その空間の境目さえあいまいに感じられる作品である。

彼らは、その後も他の魅力について、根拠となるカードを紹介し合っていた。その後、怜奈が“日本芸術の魅力って何？西洋人に何が魅力だった？”と再度質問した。

怜奈：日本ほいところ、どこ？

大我：これ（18）。墨独特のぼやぼや感。この風景好き。

怜奈：日本ほい、それ？

大我：日本の山の朝っほい

眞緒：私はこれ（26）のうっすらでている月がいい。日本ほくて、しかも首は白っほいけれど、背中黒っほくてしなやかでいい。

怜奈：私はこれ（20）。素朴なデザインだと思う。秋の風景をそのまま描いているけど、日本の秋を感じる。よく考えると秋であるのかな？落ち葉であるのかな？秋は日本が一番合っているから、これを選んだ。

詩織：私、これ（9）。タンギー爺さんの後ろにあった絵と似ている。魚を干してあるのは日本ほいと思う。

話題は、「日本美術の魅力」から、「自分の好きな作品」に自然と移っていったが、子どもたちは、好みである理由を語る中で、知らぬ間に「日本の美」というものに触れていることに驚いた。求めるときにすぐにカードを手にとって何度も眺めることができたためだと思う。

班で報告しあった結果、日本美術の魅力だと納得したものを短冊に書いてまとめた。自分たちの予想が当たっていたものはそのまま記入し、新たに発見した魅力を書く場合は、周囲を赤く縁取って区別がつくようにした。

敦の班では、敦以外の4人が「日本人の格好」や「表情の違い」という項目について人物画のカードを取り上げながら、描かれた表情から感じるイメージの拡がりについて語り合ったり、拓斗の班と同様に、“このカードが好き”という思いの交流が活発に行われたりした。しかし、「黒白で鮮やかな色をさらに鮮やかに」の項目については、なかなかそれに合った作品を見つけられず、または元の言葉の意味するものを捉えきれず、話し合いが停滞気味になった時もあった。



班員の会話に耳を傾ける敦（右）

敦は、彼ら4人の語り合いをじっと聞き、記録を取り続けていたが、短冊にまとめるよう指示が出されると、“これ、合ってるか？”とか“あと、どれが「日本人の格好」に合っていると思う？”と話のまとめ役を買って出た。しかし、実際短冊に書いたのは別の子どもたちで、敦の記録が生かされなかった部分がある。敦は、記録した内容をもっと積極的に伝えていくべきであったのではないかと考えた。4人は再度それを聞くことで、自分たちの会話を整理し、見つけ出した魅力を確認なものにしていくことができたはずである。敦の中でしか新たな魅力が発見されなかったことが残念である。短冊に書かれた魅力と敦の記録した魅力とは次のようであった。

検証すべき魅力	短冊に書かれた魅力	敦が記録した魅力
<ul style="list-style-type: none"> ・黒白を使って鮮やかな色をさらに鮮やかに ・他の色が目立つ ・表情の違い ・日本人の格好 ・華やかさ（日本独特の） 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の色が目立つ ・日常の中の美 ・華やかさ ・表情の違い ・日本人の格好 	<ul style="list-style-type: none"> ・背景が暗いけれど花の色が目立つ ・派手と華やかさは違う。上品 ・黒＋金が日本の華やかさ ・日常

書かれた短冊は、黒板に班の代表が貼りに来る。

すでに貼ってある短冊の内容を確認めて、似たような内容だと思えば固めて貼るように伝えた。出てきた代表同士が、手にした短冊を見せ合い、他の短冊と見比べながら貼っていく。そこで魅力の分類分けが行われている。そして、代表の子どもたちの動きを座って見ている子どもたちの思考の中でも同様なことが行われている。

新たに見つけた魅力を中心に班ごとに報告を行った。この段階でどの程度教師から抑えるとよいか迷った。短冊の一つに「リアルに描いていない（本物に近づけようとしていない）」というものがあったため、教師から西洋絵画の表現方法が取り入れられた結果、絵のモデルがショックを受けたというエピソードを、高橋由一の『花魁』という作品を例に挙げて説明した。また、空間表現についての魅力がどの班からも報告されなかったので、カードの一つを取り上げながら、極端な大きさの違いを取り入れた奥行き表現について全体で考えた。



新しく見つけた魅力を報告する

(3) 見つけた魅力を取り入れて、屏風の小作品を制作しよう (第6～8時)

見つけ出した日本美術の魅力の中から、自分が納得したもの、表現してみたいものを取り入れて作品を作ることにした。他の作品の模写でもよいし、もちろんオリジナル作品でもよいから、カードの中でも多かった屏風の形で作り上げようと提案した。

さっそく子どもたちは、どの魅力を取り入れようか絞り込みを始め、モチーフを探し始めた。四季のはっきりした風景や、動植物をモチーフに選ぶ子が多くみられた。中には、歴史の教科書や資料集を持参して、熱心にスケッチする子もいた。

拓斗は、アートカードの鑑賞から、「金色や派手な色と、地味な色を使い分け、主体となるものを目立たせる工夫」と「繊細で細やかであるとともに大雑把でシンプルな構図」が魅力だとまとめた。その

魅力を表現しようとして、金地に大きく鶏の頭を描いた。四曲の屏風のどのあたりに描こうか、迷い下描きを始めるまでに時間がかかっていた。

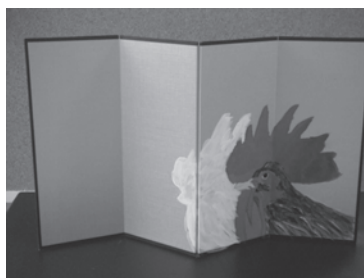


資料を参考に作品を制作する

- ・僕は、屏風に鶏の顔を描きました。表現した日本美術の魅力は、派手さとシンプルさです。顔はできるだけわかりやすくシンプルにインパクトのあるようにしました。また、色は赤を主体とした黒の羽の鶏を描きました。(拓斗)

敦は、アートカードでの鑑賞後には次のように考えをまとめている。

- ・日本の美術は西洋のようなすべてを細かく描くのではなくて描きたいものをはっきりと描き、周りをうすぼんやりとする作品が多いということを知りました。例えば教科書の『指月布袋画賛』の絵では、二人の人だけが描かれていて単純な線のみで様子がよくわかります。(敦)



拓斗の作品



敦の作品

敦は初め水墨画に挑戦してみようかとも考えていたようで、資料集の水墨画のページを広げてアイデ

イアスケッチをしていたが、最終的に着色された作品を仕上げた。

(4) 活動を振り返ってレポートにまとめよう(第9時)

アートカードを用いて日本美術の魅力を探り、その後、作品を制作することでその魅力を体感し、さらに深く味わったり、新たな魅力を見つけたりしていったこれまでの学びをレポートでまとめることにした。そしてさらに、現代の自分たちの生活にも目を向け、自分たちが日本美術の魅力、日本の美意識に触れる機会とは、どのような時かも考えてレポートにまとめた。

敦は、書道の筆使いに日本画と共通する魅力を見つけている。

・書道の行書というのは、崩したような文字なので、日本美術の魅力のように、本物に似せない感じが共通している。何でも派手にしないところに日本人の慎み深い雰囲気があって魅力を感じる。うすぼんやりしたり、とても力強かったり、また、しなやかな曲線で描くところも似ている。日本の美とは、余白を多くすることで、見る人が想像できることだと思う。

また、拓斗は現代においても着物の柄には、派手さとシンプルさがある。また、建築様式の書院造にも、簡素で質素な感じはするが、そのつくりのシンプルさがいいと思うと書いている。日本の美とは「空間を意識したもの」とし、“派手で目立たせたいものはとことん前に、それをバックアップするものはとことん後ろに、という構図に美しさが見られる”とまとめることができた。

3 省察

(1) 3年間の鑑賞活動における子どもの学びを省察する

授業開始時のお勧めスピーチの継続した鑑賞活動や、作品制作の導入や途中、そして、完成時の鑑賞活動をこれまでも取り入れてきている。また、1、2時間程度の小題材の鑑賞活動も子どもたちは経験しているが、今回は、じっくりと時間をかけていくつもの作品を鑑賞して、日本美術の魅力とは、さらには、日本の美とはどのようなものかを追究する活動であった。

子どもたちは、これまでの鑑賞活動の中で培われた作品鑑賞の視点を十分に活用してアートカードと向き合っていた。また、活動後にレポートで自身の学びを振り返るとともに、現代の生活の中で、見られる日本美術の魅力、日本人の美意識にも迫ろうとしていた。この活動を通して、自身の鑑賞の視点を確認することにもなったのではないだろうか。獲得した作品鑑賞の視点を、今後の鑑賞活動に活用して

いくことを期待するとともに、そのためのカリキュラム構成を授業者として考えていきたい。

(2) 過去の省察を捉え直し、次なる学びに生かす アートカードを活用して仲間と鑑賞活動を高める

日本美術の魅力を理解するために、これまでは西洋作品との比較鑑賞を中心として題材を展開していたが、今回はアートカードを用いて、数多くのカードを見比べることで、共通する魅力を見つけ出すという方法をとった。これまでは、仲間と額をつき合わせて、一つの作品資料を見つめるという体験から、仲間との探究活動のよさを感じて欲しいというねらいもあった。今回アートカードを用いてみて成果として挙げられるのは、予想外に作品を味わうということ子どもたちがしていたことである。分析で留まり、作品を味わうところまでいかなかったこれまでとは違い、何度でも気に入ったり興味を持ったりしたカードを手元に引き寄せて見ることができるという点で、カードを用いたのは効果的であった。

また、自分達が挙げた予想を検証するというかたちで作品鑑賞を進めていったので、常に、「でも、・・・」とか「やっぱり・・・」とカードを見比べながら、カードがあることで常に批判の意見が出て、子どもなりの見方がどんどん生まれた。学習指導要領にも2、3年生では、「批評しながら」という文言が挙げられているが、図らずともそのような活動になったのではないかと思う。

今回活用したアートカードは、福井県立美術館が制作した館の所蔵作品によるアートカードである。今後、県立美術館を訪れる機会があった時に直接本物の作品に触れることができると考え、活用することにした。そのような機会に子どもたちの作品の見方がさらに深まり、広がればと考える。

鑑賞活動を深めるための探究のプロセスを問い直す

西洋と日本の絵画作品の比較鑑賞を繰り返し行ってきたこれまでの展開から、本題材では数多くの日本美術作品のみのアートカードを見比べながら、そこに共通する魅力的特徴を見つけていくことにした。

班によっては、任された魅力を検証するために、“「西洋は本物に近い」というけれど、西洋の作品と比べなきゃよくわからない”と訴えてくる班があり、その時には彼らに、西洋の作品を紹介して比較鑑賞させた。子どもたちの思考の筋で自然と比較鑑賞がなされたのである。

最初に立てた子どもたちの予想を、どのようにその後の探究活動に生かしていくかも、班で幾つかの項目を分担して検証していくことで焦点が絞られ、

子どもたちの話し合いも具体的になったと考える。任された魅力と自分が予想した魅力、さらに新たな魅力も見つけていこうと、探究が広がるように工夫した。

本校美術科の核となる学びは、『「みること」と「つくること」をつなげる』であるが、今回の題材では、「みることのためにつくることを取り入れる」という展開をデザインした。従って、「つくることのためにみることが仕組まれている題材」とは、つくる目的が違う。表現する上で大切にすることは子どもたちが決定する。自分が表現したいと思った日本美術の魅力である。

拓斗は、鶏の頭を描いて、これで終わるかと考えていたが、教師から屏風の画面上のバランスはこれでいいかももう少し考えてみるようにアドバイスを受け、シルエットのようなものを表現することにした。

- ・また、日本美術の中には、本当はないような雲とかがあるので、霧の影みたいなものを付けて幻想の世界を想わせるような感じにしました。

教師からの指示がきっかけではあるが、制作する中で新たな魅力を思い出し、作品に取り入れることができた。また、敦は制作時を振り返って次のように述べている。

- ・僕は、アートカードからわかったことのほかに、日本の植物や風景を大きく描く美しさというものもあるんだとわかりました。これは隣の席の菜々さんが屏風に描いている絵を見たからです。あるものが自分とは違った視点で描かれていると、きれいだと思ってしまうものだなと思いました。

描きながらも、仲間の活動を見ている。そして、表現者として、新たな魅力に気付いている。

個の考えが仲間に広がり影響を与え、制作を通して再び個人に返り、それがまた仲間に広がる。レポートをまとめた後に再度全体鑑賞の時間を設けて、共有する活動を取り入れることで、学びの定着が図られるのではないだろうか。次年度のカリキュラムの改善を図りたい。

(吉田 千春)

参 考 文 献

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』2009.
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第38号 2010.
 矢代幸雄『日本美術の再検討』ペリカン社 1994.
 神原正明『快読 日本の美術 美意識のルーツを探る』頸草書房 2001.